「滑稽句」を楽しみませんか

金澤 健

滑稽句とは

以前、滑稽俳句論壇に書かせて頂いた際（二〇一三年八月～十月）、滑稽俳句としても川柳としても通用する五七五句作りの精進を目指す目標を掲げ、筆を置かせて頂きました。その後の試行錯誤の経過、並びに、現在の精進の状況をまとめ、皆さまにご報告したいと、再び筆を取らせて頂きます。

以前、前述のような五七五句を、やや肩に力も入り、「諧句」と勝手に名付けておりましたが、友人、知人には「怪句」扱いされ、それでは、「俳諧句」ではどうかとぶつけたら、「徘徊老人の心境を詠むのか」と言われる始末でした。そこで「普通の日本人なら、誰にでも理解できる」ように、「滑稽句」とネーミングを改めることと致しました。

滑稽句と聞けば、皆さん誰しも、「滑稽なことを詠んだ句」と思われるのではないでしょうか。そうです。「滑稽句とは、誰しもの身の回りにある滑稽やおかしみを、五七五のリズムで詠んだ句」なのです。しかし、この定義では、「それは、俳句なのか、川柳なのか」というご質問が当然出てくるでしょう。それに対する私の考えは後述させて頂きますが、ともかく、「おかしみ」という、人の世の最も素晴らしい感動のひとつを五七五のリズムで詠むことにより自分も楽しみ、句を読んでくださる方々も楽し

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

み、喜んで頂くことが、滑稽句を作る最大の意義ではないかという心境にここ一年で至りました。そして、「おかしみを詠む自分」と「句を読んで頂く人」との間で、おかしみという上質の感動を分かち合うことにこそ、滑稽句の究極の存在意義がある、と思うに至ったことをご報告させて頂きます。

まずは、「滑稽俳句を作るのだ」とか、「滑稽川柳をつくるのだ」とかの気負いや思い入れは取りあえず置いておいて、目にしたり、耳にしたりする身の回りのおかしなこと、滑稽なことを、日本人ならば自然と身についているであろう五七五のリズムに乗せて、口ずさむなり紙切れに書き留めることから始めましょう。これこそが、滑稽句つくりの基本なのです。

そして、出来上がった滑稽句が独りよがりになっていないか、おかしみ、滑稽が読む人に伝わるかを句会などで確かめ合うことが、次の作業となります。よく吉本新喜劇のお笑い芸人が「スベル」という表現を使いますが、独りよがりのおかしみ（お笑い）で、読む人（観る人）が、しらけて笑えるに笑えないでは感動の共有にはなりませんので、気を付けねばなりません。私は、この五月に「滑稽句を楽しむ会」を松山で立ち上げ、俳句、川柳にこだわらない五七五を仲間と詠みあって楽しんでおります。

最後に、私の好きな滑稽句を次にご紹介して、今回を終わらせて頂きます。俳句の世界の方の作品もありますし、川柳の世界の方の作品もあります。作者名を挙げると、皆さん、色眼鏡で見られるかもしれませんので、作者名は伏せさせて頂きます。俳句、川柳の色眼鏡なしで、滑稽な句として読まれ、その滑稽味を楽しまれることを期待致します。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

人間を蹴る馬のゐて天高し

孤高とはかくなるものか木守柿

安々と海鼠の如き子を産めり

五月かなものみな天をこころざす

雑踏が好きだから行く初詣

（続く）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。